

シンポジウム「教化・教養・教育—芸術の機能を考える—」

趣旨説明：温彬（演劇学・大阪大学大学院・博士後期課程）＊コーディネーター

芸術は、審美の他、諸多に現実的な機能を担っている。その中に、最も人間と関係深いのは、「教え」という機能ではないだろうか。そうであれば、芸術は我々に何を教えてくれるのだろうか、またこの教えを通して我々は如何なる人間になることができるのだろうか。異なる時代と文脈において、この答えは必ずしも同一ではない。

このため、本シンポジウムでは、先秦期の中国雅楽、江戸期の日本の能楽、および現代の教育演劇を例として、上述の二つの問題を考えていく。これを以て、芸術の「教え」という機能の、時代の流れとは異なる文脈に置ける諸々の様相を把握し、その未来における可能性を問う。

研究発表 1：温彬（演劇学・大阪大学大学院・博士後期課程）

「楽以成人と清明象天一荀子楽教思想における二つの側面—」

本発表は、荀子がいかに孔子の楽教思想を継承し、またそれを発展させたかに関心がある。これまでの先行研究は主に荀子の楽教思想と彼の人性論との関連性に焦点を当ててきたが、孔子の楽教思想との受容がほとんど見落とされてきた。本研究を通して、春秋から戦国の末期にかけて儒教の楽教思想の発展の流れを整理することができると思われる。そこで、荀子が孔子の「楽以成人」の楽教思想を継承する一方で、孔子の「社会・政治」という立場を超えて、楽教を通して人が「宇宙」と一体となることを明らかにする。さらに、それこそが荀子の楽教理論の「社会・政治」と「宇宙」の二重構造の礎となっていることを主張したい。

研究発表 2：中尾薫（演劇学・大阪大学）

「寺子屋にみる教養としての謡文化」

本発表では、江戸時代、庶民を対称とした教育所寺子屋で、謡や小謡が教えられていたことを取り上げる。能の一要素である謡、もしくは小謡は庶民文化として浸透していたが、少なくとも元禄期には、童子教育として用いられていたことが知られている。その実態を推測しうるのが、出版文化の隆盛ともに多く刊行された小謡本や往来物で、これらは寺子屋の教科書として用いられていたとみられる。本発表では、小謡本や往来物、あるいは香月牛山『小兒必要養育草』の記述を参考に、小謡の修得が人間の育成にどのような役割を果たしていたのか、またその考え方の根幹をなすと思われる芸能の社会的機能について考察する。

研究発表 3：須川渡（演劇学・福岡女学院大学）

「障害者支援施設あざみ・もみじの演劇実践と教育効果」

本発表では、滋賀県湖南市における障害者支援施設あざみ・もみじの演劇実践に焦点を当てる。あざみ・もみじでは、創設時より施設内の職員と利用者である寮生によって、毎年ひな祭りの時期に「寮生劇」という演劇発表が行われている（2020年以降は新型コロナウイルスの影響により施設内の発表にとどま

っている)。本発表は、あざみ・もみじの事例に加え、発表者が2007年より関わっている通所事業所における演劇制作にも触れ、演劇実践が施設の利用者にとってどのような効果をもたらすのか検討する。これらの演劇実践は、言葉の習得などの教育的効果に加え、近年はコミュニティの意味を問い直す方法としても機能していると考えられる。